

② 市民の皆さんへのメッセージ

こなんえーやん！
その1

◆こんなことできるのかな？ …すでに始まっている新しい動きに学ぼう！

第3章でもご紹介した本能学区や梅津学区では、自治連合会（地縁組織）のなかに「まちづくり委員会」という、自由参加型で年功序列もなにもない組織がつくられており、その委員会が中心となって広く学区住民の参加を呼びかけながら、地域課題の解決に取り組んでいます。

本能学区のまちづくり委員会も梅津学区のまちづくり委員会も、地縁組織の一部でありながら、誰でも参加しやすいテーマを掲げて活動し、自分のできる範囲で活動に関わることができ、会議の場でも自由に意見を述べるができる雰囲気があるという点において、志縁組織に極めて近い性格を備えています。それによって地縁組織の長所（地域内ネットワークや信用力）と、志縁組織の長所（想いを共有するものが支える、敷居が低い）を併せ持つことが可能になったとすれば、「まちづくり委員会」はいわば「地縁組織内志縁組織」とでも呼べそうな組織のあり方だ可以考虑することができます。竹下さんが「本能学区だったらうまく協力できたかもしれない」と語ったように、あるいは梅津まちづくり委員会が環境団体（志縁組織）と協働で活動しているように、両「まちづくり委員会」が比較的志縁組織となじみやすいのも、組織形態的にも構成メンバーの資質的にも上記のような特性を備えていることによるのでしょう。

このように、ともすれば慣習や周囲の人の思惑が優先されやすかった地縁組織のなかに、個々人の想いを活かし、想いをもった個人が協力、協働することで地域をよくしていこうとする動きがでてきたことは注目に値します。こうした動きが地縁組織がおかれている現状に対する危機感から生まれているとすれば、今後多くの学区で遅かれ早かれこのような動きが求められるものと思われます。

◆梅津まちづくり委員会役員のコメント

失敗というものは絶対あって、失敗がゆくゆくは成長していくステップのためのハードルだと思えたら、そんなに気にならないと思うんです。地域で活動をする場合は自分だけが行動するのではなくて、周囲の盛り上がりが不可欠で、地域の住民の方々の思いが、同じ方向へ向くような働きかけが必要です。地域住民の声を少しでもいいから活動の中に取り入れていくような取組の仕方を考えていけばいいのではないかと思います。[円卓会議より]

◆本能まちづくり委員会・西嶋さんのコメント

地域の各種団体の活動はものすごく忙しすぎます。「あんな中に入ったらかなわん」と思っている人も多いでしょう。ところがまちづくり委員会は好きなときに来て好きなことをやっています。そして自分たちだけでやらずに、各種団体や町内会も巻き込みながら活動しています。一ヶ月にまちづくり委員会のために何日も動かなければならないということはまずないですね。

またフォーラムメンバーの長谷川さんが関わっている「大文字保存会」も、本来きわめて地縁的で閉鎖的な組織であったものが、時代の要請の中でNPO化し、地縁と地域性を基盤にしつつも、若い世代や他地域の人たちを巻き込み、京都の文化を発信する役目を担いつつあります。もはや地縁組織と志縁組織の境界すらあいまいになりつつあるように思います。

◆大文字保存会・長谷川さんのコメント

京都だけでなくそれぞれの土地には古くから続く行事があり、地域性によって村社会が存在しているところもありますが、今日に至っては有形、無形の文化事業以外の活動は誰もが参加できと思っています。私が受け継いでいる送り火は古来の家の行事であり、地域の人であっても参加はできません。しかし、私は送り火に5年前からボランティアを募っています。歴史ある事業に一般の人達を参加させることには様々な意見がありました。きっかけは京都2001幕開け事業です。京都市長から「過去を悼み、未来に希望」の火を灯す事業を保存会だけですのでなく公募市民にも参加することを要請されたのです。数百年の歴史ではじめての試みでした。そして迎えて大晦日午前零時に保存会員と公募市民により五山送り火が点灯されたのです。

下山後、以後も参加する意思が有るかと聞いたところ、赤穂浪士ではありませんが、47名が手を挙げて現在も参加していますし、以後も大学グループや一般市民、社会人も増えています。このように、受ける側もその趣旨と仕組みをはっきりと示し、参加する側もしっかりと理解して共に事業の先を見つめて進むことが重要だと思います。

なるべく多くの人々を（地域住民もそうでない市民も…たとえば学生のような）巻き込みながら、みんなで地域をよりよくしていくほうが「お得」だとすれば、本能学区や梅津学区、あるいは大文字保存会に学んで、志縁活動型の人も地縁活動型の人も寄り合えるような場をつくることに取り組む段階に来ているように思います。そのためにちょっと市民の皆さんに心がけていただきたいことをまとめてみました。

志縁組織の人の心がけ	地縁組織の人の心がけ
ご近所さんとのお付き合いも必要やなと思ったときは、とりあえず身近な地域イベント（区民運動会や大掃除など）に参加してみましょう。自分の身の回りのことに取り組みたいと思ったときは、ご近所や地域のために何かできないかと思ったときは、とりあえず地域活動に顔を出してみましょう。	「興味あるんやったら来たらええのに」というのは地域活動になれた、地域に知り合いの多い人の言い分です。新しい人は仲間内でやってる輪の中には入りにくいものです。「来たらええやん」ではなく「あなたに来てほしい」というメッセージが伝わるような迎え方をし、地域のことをわかるように説明しましょう（大学生が新入生をサークルに勧誘するときの要領です）。
まずは作業に参加して一緒に汗をかくことから始めましょう（祭りの準備とか資料作りとか）。	頭から押し付けるのではなく、相手の思っていること、疑問や不安、そして期待をきちんと聞く態度を示しましょう。また、年功序列的態度は避けましょう。
新しく引っ越してきた人は、地域の人達が抱えている地域への誇りや愛着、その土地ならではの文化やルールがあることを理解し、仮にその文化やルール自体には完全に共感できなくとも、少なくとも地域の人たちの想いを尊重しましょう。 地域のことを教えてください、勉強させてくださいという気持ちが大切です。	地域は古くからの人だけのものではなく、新しく入ってきた人も地域の仲間だと思うことが肝要です（地域活動はそこに住む人達みんなのためのものなので）。新しい考えを持つ人達がいたらその人たちの考えや想いを聞き、そこから地域の次の時代の活動を考えていくようにしましょう。

こんなえーやん！
その2

◆市民参加社会を創るために 自らも変わる努力を。参加する市民になろう！

市民参加の前提として、私たちの相互理解を促進する工夫が必要であり、それは、市民相互のコミュニケーションの機会を増やし、お互いを理解し合う努力をしていくことから始まります。また、市民参加を進めるためには、市民自らが市民参加の主体であることを自覚して、積極的に参加していくことも必要です。

市政参加の場においても、市民活動の場においても、元気な市民がワイワイ語り合うような社会が、市民参加が進んだ社会なのではないかと思います。市政は、できるだけ身近で、気楽に参加できるもの、市政の情報、市民活動の情報も、井戸端ならぬ水道の蛇口のように、至るところにあり、誰でも近づけるものであって欲しいと思います。



「市民参加」とは、多様な市民が多角的に参加する、参加できる社会づくりのための「しかけ」だと思います。そのための合意形成をしていく「しくみづくり」が必要です。また、行政の補完的役割を果たすだけでなく、市民自らが統治の主体であることを自覚し、時には行政をチェックする、権利としての参加の視点も忘れてはいけないと感じています。【鈴木さん】



世間のことに対して「…したほうがいい」「…しないほうがいい」などと口で言うのは簡単なことですが実際に行動に移すとなると難しいことです。市民参加にとって一番大事なことは、成功しようが失敗しようが、まず「行動すること」だと思います。そしてその行動が尊重されるような環境や意識を、社会全体に広めていく必要があるのではないのでしょうか。【千葉さん】



誰かがすることを自分から進んでやってみる、思っているなら実行する、遠くで見聞きしているのなら近くへ寄って見聞きする、「見てやろう、聞いてやろう、行動してやろう」を実行して欲しいと思います。多様な人たちと協力することによって、自分の多様性に驚くこともあったり、他の人たちの考えに共鳴したりすることが喜びとなるでしょう。どのような活動や事業に参加するにも個人の意見を述べるだけでなく、活動、事業の妨げになるときは個人の意思を我慢し、常に全体を見据えて協力と理解を示すことも必要だと考えます。【長谷川さん】



地域によって状況は違うと思いますが、どのような課題も「否定からではなく、肯定から物事を進めるところから入ること」が原点だと思います。その心掛けがあるかないかで、結果に雲泥の差を生みます。私はどんな案件でも、前向きに話をし、お互いに擦りあわせをしていこうという気持ちで取り組んでいます。協力をできるところはできるだけ協力をさせてもらおうという気持ちを持っていれば、また相手も快く協力してくれます。【西嶋さん／再掲】



大事なものは「誰か」ではなく「自分」がやること、その志を仲間にも伝えていくことが市民参加への一歩だと感じています。【竹下さん】

相互の理解の促進を図り、市民参加を推進するために、どんな市民になりたいか、あるいはどんな地域住民になりたいかを考えてみました。

☆こんな市民、こんな近所ってえーやん！

こんな市民ってえーやん！	こんなとなり近所ってえーやん！
・自律し、自立する、ともに解決策を模索する市民 ・頼り上手、頼られ上手な市民 ・地域や社会での役割を理解している市民 ・助け、助け合える仲間がいる市民 ・多様な意見を理解し、尊重し合える市民	・色々な世代の方が元気に暮らせるご近所 ・まちの歴史や暮らしの智慧を、やさしく語り継ぐご近所 ・いざというときに助け合えるご近所 ・先入観を持たずに何でも話し合えるご近所 ・情報通で便利なご近所 ・次々と新しい活動が始まるご近所

◆市民参加推進フォーラムの今後の展望と課題

「やる気のある市民をがっかりさせてはいけない」この言葉は市民参加推進フォーラムが「市民参加推進計画」の取組状況の調査、研究を重ねるなかで発見した大事なキーワードのひとつです。この提案書の中には、市民の皆さんやフォーラム委員の率直な声から見出した、5つのエピソードが示されていますが、それらの多くが、熱意を持って取り組んできた方が、コミュニケーション不足などのちょっとしたことがきっかけで、活動をあきらめ、志をなくしてしまった「がっかりの事例」です。今回、それらの事例を基に「市民参加こんなえーやん宣言！」と題した、市民参加に関わる行政への提案と、市民の皆さんに対するメッセージを取りまとめましたが、我々フォーラムが考えていかなければならない課題はまだあります。

例えば、市民の経済行動が大きな影響を及ぼす現代社会では、「事業者や企業と市民、行政の市民参加」を考えることが不可欠ですし、市民のニーズを把握するための新たな制度設計についても、丹念に調べ、議論を重ねる必要があるでしょう。また、市民の中には、熱意を持ちながらも、制度や言葉の壁、身体的な事情や生活環境などにより、市民参加の入り口に立つことすら困難な仲間たちがいることを、私たちは理解し、意識して、市民参加を考えなければなりません。

市民参加を「誰もが気軽に参加できる身近なもの」にするためにも、具体的で分かりやすい事例やノウハウを、市民の皆さんにお伝えすることが必要であり、そのためにもフォーラムは、自主勉強会などを通して更に調査や研究を進める必要があると考えています。

行政の考える市民参加の取組はもとより、市民が自主的に進めているまちづくりに関しても、最初からゴールがあるものではありません。市民参加は何かの建物を建てるといったわかりやすい目標があって、それに向かって進んでいくというものではなく、次々と出てくる色々な課題に対して敏速に答えながら、「市民参加のかたち」を変えながらも発展させていくという非常に難しいものだと感じています。いわば市民参加の推進の中には、過去の形を踏み越えて進まなければならないという厳しい試練も含まれています。

また、「市民参加」は言葉や概念を定めて、それを目標にして行動していくというのではなく、市民の皆さんが普段やっていることに名前をつけていくように、「あなたがやっていることは市民参加」「あなたの活動は市民活動」といった発見をしながら、市民参加の言葉や仕組みを市民の皆さんの活動の実態に合わせて変えていくというスタンスを取るべきだと考えています。

行政はこれまで、地域開発型の組織としてある一定のレベルまで社会資本を整備し、市民生活をよくするための事業を運営する非常に効率的な組織としての役割を果たしてきました。しかし、現在は、そ

の資本をどのように有効に使って市民の視点に立って利便性を高めていくかという、「市民の要望に沿って市民にこたえていけるまちづくりにしよう」という考え方へシフトする、大きな転換期に来ていると思います。そしてそのときに市民と行政をつなげる役割を果たすのが、他ならぬ「市民参加」です。

私たち市民参加推進フォーラムは、市民参加の重要性とその可能性をより多くの市民の皆さんにお伝えし、実感してもらうためにも、至るところに出かけていって、誰とでも接することができる心構えを常に持ち続けていきたいと思っています。

